18　仏教と芸能 ―能楽を中心として―　〈4コマ〉

みのわ けんりょう
蓑輪顕量
東京大学大学院教授

日本仏教と芸能の関わりを能楽を中心にして考察する。能楽は最初は猿楽と称されたが、それは、奈良朝期に大陸から伝わった散楽と言われた芸能がもとになったと考えられている。やがてそのような猿楽と、寺院に伝えられた呪師と呼ばれる芸能および農村に伝えられた田楽などが融合して猿楽が大成され、やがて能楽と呼ばれるに至った。その猿楽にとって重要な座が大和四座であったが、彼らは興福寺に行われる重要な行事に出仕する義務が負わされていたのである。

猿楽が芸能の領域に到達するには、観阿弥、世阿弥親子と、世阿弥の娘婿である金春禅竹の登場を待たねばならなかった。世阿弥は曹洞宗寺院と関係があったことが知られ、その主著である『風姿花伝』には、禅的な影響を見ることができる。金春禅竹にも禅宗との関わりがあり、達磨禅の影響を受けたことが、『六輪一路之記』から見て取ることができる。世阿弥の主張する幽玄にも、禅の影響を見て取ることが出来るし、また学びの上でも心に響くものが数多くある。一方、金春禅竹は、禅の「本来無一物」の教えに導かれ、芸術論の上でも、仏教に根ざしたものを提示したことが明らかになるであろう。とくに中世の時代の芸術論には独特のものが有り、亡霊が語るという興味深い演目が数多く制作されていった。禅竹の能楽には亡霊が主人公となるものが多く、一つの特徴となっている。日本の能楽に与えた仏教の影響と題し、講義を行う予定である。

[日　　時] 8月5日(土)　13:30～15:00, 15:20～16:50、8月6日(日)　10:30～12:00, 13:30～15:00
[テキスト] レジュメ配布
[受 講 料] 4,800円